

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：82606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530903

研究課題名(和文) 外見関連患者サポートプログラムの有効性の多面的検討に関する研究

研究課題名(英文) Multifaceted Examination of the Effectiveness of the Appearance-Related Support Program for Cancer Patients

研究代表者

野澤 桂子 (Nozawa, Keiko)

独立行政法人国立がん研究センター・その他部局等・その他

研究者番号：30469449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：がん治療に伴う外見変化に関する患者支援が求められている。研究者らは、平成21-23年度研究(基盤C)を基に、4段階の外見関連の患者支援プログラムを開発した。継続して平成24-26年度は、研究：情報提供を中心とした外見関連プログラムの有用性に関する研究として、当該プログラムの効果を多面的に検証するとともに、その推進役となる医療者への効果的な研修試案の作成を目指して、研究：医療者教育研修プログラムの開発とその有用性に関する研究を行った。患者支援プログラムは、患者の感情状態を改善させ有用であるとともに、それを実施する医療者の成長も促進した。今後、この研究の成果を全国に普及する予定である。

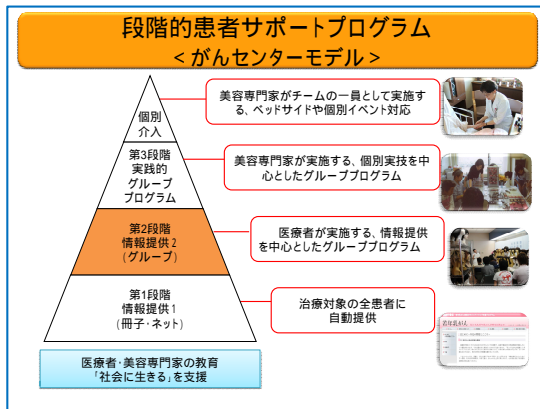
研究成果の概要(英文)：It is necessary to support cancer patients undergoing treatment-induced changes in physical appearance. The researchers developed an appearance-related support program consists of four phases based on the studies from 2009 to 2011. From 2012 to 2014, the study titled "Study 1: a study of the effectiveness of the appearance-related program focusing on information provision" was conducted to investigate the multifaceted effect of the program. It was shown that the support program was effective as well as it enhanced professional growth of medical stuffs. In addition, establishing an effective education system for medical stuffs to provide the patient-support program, we conducted a study called "Study 2: the development of the appearance-care educational training system and the examination of its effect." We are planning to spread the findings of the research nationwide.

研究分野：心理学

キーワード：がん 外見 患者支援プログラム QOL 医療者教育

1. 研究開始当初の背景

癌治療に伴う外見の変化を支援することは、患者の QOL を向上させるだけでなく、治療継続や社会復帰の促進に繋がるため重要である。筆者らが 2009 年に実施した 700 名に対する調査では、97.4%の患者が外見の変化とケアの情報は病院で与えられるべきだと答えており、外見支援のニーズは極めて高かった。Pelusi(2006)も、エビデンスに基づいた「治療中、治療後に、自尊心とボディイメージに対する前向きな姿勢を与え、伸ばす介入方法の開発」が有用だと提言している。そこで、筆者らは、平成 21~23 年度の基礎研究(基盤研究 C)から得られた知見を基に、医療現場、とりわけ専門的ながん治療施設で行われるべき、4 段階の外見関連患者サポートプログラム(がんセンターモデル: 下図)を完成させた。がん患者は、女性のみならず男性や小児もあり、必要な支援もさまざまであるため、患者のニーズに応じた段階的なサポートプログラムとなっている。



しかし、「がんセンターモデル」を4つのレベルに分けた場合、すべてにエビデンスがあるわけではない。美容の専門家による個別ケアやグループ指導(第3・4段階)については、すでに複数の研究で患者の QOL を向上させることが確認されている。また、インターネットや冊子を用いた(第1段階)についても、最低限は「有害事象に対する対策は医療者の説明義務の範囲内」として実行されており、それ以外の取り組みについても有用性に関する報告がなされている。そこで本研究は、唯一明確になっていない医療者が実施可能な情報提供を中心としたグループ形式の支援プログラム(第2段階: 以下、支援プログラムとする)の有用性を明らかにする。今後、ますます、働きながら治療を行う患者が増えると予想されている。患者のサバイバーシップ充実に向けて、この支援プログラムの有用性を多面的に検証し、医療現場で発信することが求められる。

2. 研究の目的

平成 24-26 年度は、平成 21-23 年度の継続研究として、支援プログラムの効果を多面的に検証するとともに、将来、その担い手となる医療者への効果的な研修試案の作成を目指す。

具体的には、複数の研究から構成される研究、研究を行う。

(1) 研究 : 情報提供を中心とした外見関連プログラムの有用性に関する研究

研究: インタビューをもとに、患者自身の外見変化への対処行動を明らかにする。必要であれば支援プログラムの内容を修正する。

研究: 支援プログラムが患者の心理的 well-being を含む QOL に及ぼす影響を検討する。

(2) 研究 : 医療者教育研修プログラムの開発とその有用性に関する研究

研究: 医療者による外見支援の意義を理解するための教育研修プログラム(以下、研修プログラムとする)「基礎編」を開発して医療者に実施し、評価する。研修の目標は、ピアランスケア(以下、外見ケアとする)の理念と基礎的な知識の習得である。

研究: 研修プログラム「応用編」を開発して医療者に実施し、評価する。研修の目標は、外見ケアの理念のもとに、患者との一対一対応を可能にする知識及び基本的技術を習得し、多職種との連携や情報を吟味する視点を醸成することである。

研究: 医療者が患者に支援プログラムを実施して行くことが、医療者自身にどのような影響を及ぼすのか、検証する。

3. 研究の方法

(1) 研究 : 情報提供を中心とした外見関連プログラムの有用性に関する研究

研究(平成 24 年度): がん専門病院に通院する女性乳がん患者 23 名(平均 48.7 歳)に半構造化面接を実施し、そこで得たデータを元に外見変化への対処行動に焦点をあて質的帰納的な分析を行った。

研究(平成 25-26 年度): がん専門病院の乳腺科又は婦人科に通院中で初めて化学療法を受ける女性患者(20-70 歳)を、介入群 29 名(51.5 歳)・統制群 30 名(52.4 歳)にランダム化し、支援プログラムの心理的効果及び生理的効果を測定した。測定ポイントは、1 回

目:プログラム開始前、2回目:プログラム終了後(統制群は1回目測定より60分経過後)、3回目:初回測定より3か月後。患者は、初回測定より1週間以内に化学療法を開始した。この支援プログラムは、医療者が実施し、所要時間は約60分。内容は1)外見変化のプロセスと具体的対処法についての知識提供、2)病気中心の生活を送らなければならない等の思い込みから患者自身を解放するための心理教育、3)"プチ変身タイム"等のレクリエーション要素、から構成され、QOLの向上や治療の継続、社会復帰の促進につながることを意図して開発されている。

(2)研究 : 医療者教育研修プログラムの開発とその有用性に関する研究

研究(平成24年度):2005年より患者の外見支援に取り組んできた医師・看護師・薬剤師・心理士による多職種チームが、理論編と技術編からなる計4時間の基礎研修プログラムを作成した。2012年11月、その基礎研修プログラムを「医療者によるアピアランスケアの教育研修会:基礎編」として実施した。研修案内をがん診療連携拠点病院395施設に配布したところ、62施設から参加の希望があった。100名の定員に対して、180名の応募があった。実際に参加した57施設の92名(男性2、女性90:年齢24-67、平均38.4歳:医師1、看護師89、その他2:がん職務経験年数1-27、平均10.3年)に対して、質問紙を用いて外見ケアの実施に関する自己効力感12項目や必要な基礎知識20項目の合計点を測定し、参加前後の変化を比較した。

研究(平成26年度):基礎研修終了後のアンケート結果を踏まえ、多職種チームは、理論編と技術編からなる計7時間の応用研修プログラム案を作成した。2014年11月、応用研修プログラムは、「医療者によるアピアランスケアの教育研修会:応用編」として実施された。参加者は、2012年又は2013年の基礎研修の既修者(定員80名)である。全国のがん診療連携拠点病院56施設より参加者76名(医師1・看護師72・助産師2・心理士1)欠席者4名であった。

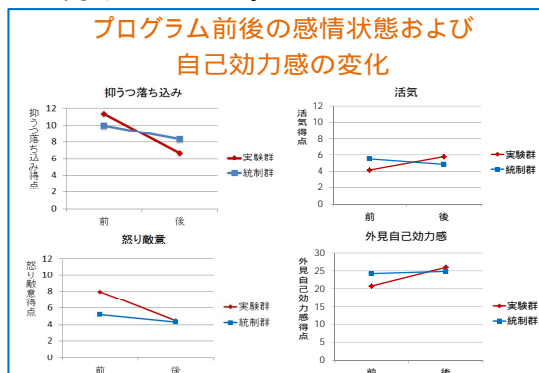
研究(平成25年度):第2段階の支援プログラムを他施設に広めるため、九州地方のがん専門病院の看護師4名に対して特別研修を継続的に行った。その際、支援プログラムを新たに組織的に実施する際の医療現場の課題と、看護師への影響を検討した。具体的には、教育連携のもと支援プログラムを開始した他院看護師4名に対して、特別研修3か月後・6か月後に半構造的面接調査を行いICレコーダーによる録音後、逐語録を作成し、KJ法を参考にデータの分類・整理を行った。

4. 研究成果

(1)研究 : 情報提供を中心とした外見関連プログラムの有用性に関する研究

研究:患者の外見変化に対する対処行動のプロセスが明らかになった。化学療法により生じた、患者の外見変化の体験とその対処のプロセスは《他者との関係性とそのフィードバックにより変化する》過程であり、看護師を含めた他者の関わりが重要性をもつことが明らかとなった。具体的には、患者は化学療法開始前より【外見変化による不安】をもつが、それは、[外見変化が死やがんの象徴である]ことに由来している。治療前の自分と異なる姿には、[ビジュアル的・感覚的な自分への違和感から生じる自己像のゆらぎ]をもつと同時に、[外見変化による他者との関係性の変化への懸念]も生じる。このような不安・懸念を生じさせる外見変化に対して、患者は【外見変化への対処行動にバリエーションをもたせる】形で対応していた。対処行動は[周囲の様子を観察しながら調整]され、外見変化の不安や対応は【他者との関係性の水準により不安の程度が変化する】ことが明らかになった。

研究:支援プログラムの効果が明らかになった。まず、介入の前後で、群(参加者間条件;介入群・統制群の2水準)及び測定タイミング(参加者内条件;1回目・2回目の2水準)を独立変数、感情状態(POMSの6下位尺度)と自己効力感(がん患者・外見の2尺度)、唾液コルチゾールを従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果、POMSの混乱下位尺度以外の全得点において交互作用が有意であり(緊張不安 $F(1, 41) = 5.42, p < .05$; 抑うつ落ち込み $F(1, 39) = 7.13, p < .01$; 怒り敵意 $F(1, 40) = 6.87, p < .05$; 活気 $F(1, 41) = 7.55, p < .01$; 一般的自己効力感 $F(1, 38) = 4.67, p < .05$; 外見自己効力感 $F(1, 40) = 11.42, p < .01$)、介入群における測定タイミングの効果が有意であった。すなわち、緊張不安・抑うつ落ち込み・怒り敵意・疲労に関しては、介入群においてプログラム前よりも後の得点が低くなり、一方、活気・一般的自己効力感・外見自己効力感に関しては、介入群においてプログラム前よりも後の得点が高くなっていった。



なお、唾液に関しては個人差が大きく、プログラム前後の差はなかった。また、プログラムの評価も平均 4.5 点（5 点満点）と高かった。医療者による情報提供を中心とした介入であっても、提供方法によっては、患者の感情状態を改善し、がん患者としての自己効力感を上昇させることで、闘病生活への対処行動を変化させる可能性が示唆された。

しかし、介入 3 か月後の時点では、両群に有意な差はみられなかった。統制群の患者もその後何らかの支援を得て、外見の変化に充分対処できた可能性がある。

また、3 か月後の自己効力感の高さは、感情状態の疲労 ($r=-.424, p<.05$) および混乱 ($r=-.442, p<.05$)、一般的自己効力感 ($r=.476, p<.05$)、外見自己効力感 ($r=.450, p<.05$) との相関が認められた。すなわち、プログラム参加前の疲労や混乱を感じていないほど、また一般的自己効力感や外見自己効力感が高いほど、プログラム実施 3 か月後の外見自己効力感が高くなっていた。これは、プログラム開始前の心理的介入がプログラムの有用性を高める可能性を示唆するものであるが、今回はサンプル数が少ないことから、今後はより大きなサンプルを用いた実証的検討が望まれる。

(2) 研究 : 医療者教育研修プログラムの開発とその有用性に関する研究

研究 : 基礎編の研修プログラムが開発され、試行された。基礎編研修会の終了後、参加者の知識や自己効力感は有意に向上した ($t(86)=14.5, p<0.00$)。自己効力感の向上は、積極的な行動変容に結びつくことが明らかになっており、基礎研修プログラムとしては有益であると考えられる。また、患者心理の体験を通して、医療者が行うべきアピアランスケアは、単純に表面を美しく整えるものではないことの理解も深まり、研修会の総合評価（平均 4.8 点 : 1-5 点評価）や継続研修の希望（98%）も高かった。基礎編の研修プログラムの有用性が示唆された。

体験しよう！アピアランスケア：
がん患者の外見ケアに関する教育研修・基礎編



日時：平成24年11月23日、13時～17時
研修の目標：アピアランスケアの理念と基本的な知識を習得する。

講義

1. はじめに
2. アピアランスケアに関する内外のエビデンス
3. 外見変化の心理社会的影響とアピアランスケアの意義
4. 中央病院でのアピアランスケアの導入から発展

実技

1. 体験してみよう！アピアランスケア

研究 : 応用編の研修プログラムが開発され、試行された。研修会は高い総合評価（平均 4.9 点 : 1-5 点評価）を得、応用編の研修プログ

ラムの有用性が示唆された。

始めてみよう！アピアランスケア：
がん患者の外見ケアに関する教育研修・応用編

日時：平成24年11月23日、平成25年12月22日 10時～17時
研修の目標：アピアランスケアの理念のもとに、患者さんに対応できる知識と基本的な技術を習得し、他職種との連携や情報を吟味する視点を醸成する。

はじめに
アピアランスケアの意義現状の理解と今後に向けて

- ・アピアランスケアの実践 : ウィッグの基礎知識&実習
- ・アピアランスケアの実践 : メイクアップの基礎知識&実習
- ・アピアランスケアの実践 : その他の美容知識
- ・アピアランスケアの実践 : 美容専門家や企業との連携
- ・アピアランスケアにおける医療者の役割

研究 : 看護師（平均 30.7 歳）は、特別研修プログラムの後、平均 5.2 回の自主練習を行い、院内で支援プログラムを担当していた。3 か月後と 6 か月後の調査において、そのインタビュー時間及び時間内の総発言件数は等しかった。しかし、内容分析を行ったところ、3 か月後は「プレゼン方法」「美容的知識」などの技術的側面が中心だったのに対して、6 か月後は「患者の気持ちを明るくする方法」などのより心理的側面へと看護師の視点や注意の比重が、変化していた。3 名の看護師は、回数を重ねるごとに患者との親密度が増し、通常の看護業務も円滑にいくという体験をした。残された課題は、院内の認知度や新たなスタッフ作り等運営面が中心であった。支援プログラムの実施は、患者に良い影響を与えるだけでなく、看護師自身の視野を広げ、外見支援に限らない、看護全般において、コミュニケーションの幅を広げることが示唆された。

(3) まとめ

「外見関連患者サポートプログラムの有用性の多面的検討に関する研究」においては、医療者による情報提供プログラムにも、患者の QOL を向上させる効果があることがわかった。ただし、より長期的効果を得るためには、さらに改良を行う必要がある。また、本研究により、医療者による外見ケアの実施に必要な、知識及び技術を習得するための教育研修プログラム「基礎編」「応用編」が開発された。外見のケアに関わることは、患者の支援に繋がるだけでなく、医療者の職業的成長にも結びつく可能性も示唆された。今後、この医療者による外見ケアを広めて行くことは、がん医療の均てん化にも資するものであり、社会的貢献度は高いものとする。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

野澤桂子、藤間勝子、清水千佳子、飯野京子、化学療法により乳がん患者が体験する外見の変化とその対処行動の構造、国立病院看護研究学会誌、査読有、2015、印刷中

野澤桂子、がん患者のアピランス支援外見と心に寄り添うケア 脱毛における頭髪への対応、がん看護、Vol.20、No.1、2015、79-82

野澤桂子、がん患者のアピランス支援外見と心に寄り添うケア 外見の変化に伴う患者の苦痛を理解する アピランス支援のための 1st step、がん看護、Vol.19、No.7、2014、679-683

矢内貴子、清水千佳子、角美奈子、がん患者のアピランス支援 外見と心に寄り添うケア 外見を損なうがん治療、がん看護、Vol.19、No.6、2014、585-589

野澤桂子、がん患者のアピランス支援外見と心に寄り添うケア 医療の場で求められるアピランス支援、がん看護、Vol.19、No.5、2014、489-493

Nozawa K, Shimizu C, Kakimoto M, Mizota Y, Yamamoto S, Takahashi Y, Ito A, Izumi H, Fujiwara Y, Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients, Psycho-oncology, 査読有, Vol. 22, No. 9, 2013, 2140-2147

[学会発表](計9件)

Yagata H, Watanabe T, Okada H, Saito M, Takayama T, Hmai H, Yoshida Y, Tamai N, Nozawa K, Yajima T, Shimozuma K, National survey of long-term recovery from chemotherapy-induced hair loss in patients with breast cancer, San Antonio Breast Cancer Symposium, 2014, Dec. 9th, USA.

野澤桂子、今野裕之、外見関連の情報提供を中心としたサポートプログラムの有用性に関する予備的検討、日本心理学会第78回大会、2014、9月10日、京都、90

野澤桂子、藤間勝子、清水千佳子、～患者の「生きる」を支援する～看護師に求められるアピランス(外見)ケア、拠点病院との教育連携の試み、第28回日本がん看護学会学術集会、2014、2月9日、新潟、292

和泉秀子、尾崎潤、古賀範子、熊野真紀、野澤桂子、外来通院で化学療法を受けている患者の外見変化に対する対処方法、第28回日本がん看護学会学術集会、2014、2月9日、新潟、294

藤間勝子、野澤桂子、がん患者における外

見変化の体験と対処行動の構造、日本心理学会大77回大会、2013、9月21日、北海道、408

野澤桂子、Cancer Survivor のアンチエイジング、第13回日本抗加齢医学会総会、2013、6月30日、神奈川

野澤桂子、清水千佳子、高橋由美子、和泉秀子、鈴木牧子、伊藤暖子、アピランスケアに関する教育研修システムの開発と検討、第21回日本乳癌学会学術総会、2013、6月28日、静岡、88

野澤桂子、山田幸恵、那須雅子、杉澤亜紀子、化学療法を受けている思春期がん患者の外見ケアの必要性に関する検討、第55回日本小児血液・がん学会学術集会、2013、11月30日、福岡、313

野澤桂子、市村美帆、今野裕之、若年乳がん患者の外見変化に対する対処行動と心理的健康、日本心理学会第76回大会発表論文集、2012、9月11日、神奈川、314.

なお、本研究に関して、2015年中の学会発表2件及び論文投稿を予定している。

(2015/05/01 現在)

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
野澤 桂子 (NOZAWA, Keiko)
国立がん研究センター中央病院アピランス支援センター・センター長
研究者番号：30469449

(2)研究分担者
清水 千佳子 (SHIMIZU, Chikako)
国立がん研究センター中央病院・その他部局等・研究員
研究者番号：10399462

(3)研究分担者
今野 裕之 (KONNO, Hiroyuki)
目白大学・人間学部・准教授
研究者番号：70348316